

辰野
隆

鷗外
先生

鷗
外
先
生

露伴、鷗外、漱石は僕に取っては文学の三尊なのである。三者を釈迦とキリストとマホメットに譬えたら話は
大袈裟になりすぎるが、次郎長と大政小政に擬したらあまりに卑俗になりすぎる。と云って、エラスムスとラブ
レーとモンテエニユやバルザック、メリメ、スタンダー
ルに比べても、今更ら始まらぬ。やはり、露伴は露伴、
鷗外は鷗外、漱石は漱石としておいた方が無難である。

露伴は、僕の少年期——未だその作を読まぬ前——か

ら文豪として崇めていた。然し、その高邁な作に親しむようになつたのは高等学校時代で、鷗外、漱石の諸作と殆ど同時に耽読し始めたのであつた。三先生の生前には、僕のものぐさから、その門下となつて親しく教えを受け、好機を得るに至らなかつたが、漱石先生は一高時代にその姿は屢々しばしば眺めもし、後に、その比類なき講演を二回聴聞した。露伴先生には晩年に、座談会で二回、同じ席上で間近に風丰ふうぼうに接し、その興味津々たる閑談に聴き惚れた。鷗外先生には、博物館で二回、観潮楼で二回対談して、バルザックに就いて、明治文学或は民主々義に就

いて高見に接したことがあった。

今では既に、三先生とも彼岸に赴かれてしまったが、今もなお僕の心の中では、三先生ともなお生けるが如くである。時々思い出したように、三先生の著作を書架から取り出して読みふけることがある。露伴ものでは、『幽秘記』、『幻談』、『七部集評釈』。漱石ものでは、『吾輩は猫である』、『こゝろ』、『講演集』中の「作家の態度」、鷗外ものは、『魚玄機』、『寒山拾得』、『栗山大膳』、『都甲太兵衛』、『寿阿弥の手紙』、『細木香以』、『佐橋甚五郎』、『かのやうに』、翻訳では『冬の王』（ハンス・ラ

ント）である。

曾て、芥川龍之介が鷗外を評して「軍服を著たギリシア人」と云ったことがあつたが、その評は必しも當つていないようである。私見を許されるならば、鷗外は要するに山県有朋幕下の一官僚であつた。それ以上でも以下でもない。僕はそれを咎めとがようとは思わぬ。鷗外の才幹を以て軍医総監、博物館長の地位に就くことは当然であり、寧ろ報いらるるところ少かつたと言つても過言ではない。然し、不世出の才能人格が地位にも恵まれず、恵まれても執せず棄て得る意地と襟度に至つては之を露

伴と漱石に見出す、と断じても不当ではなからう。

鷗外先生はドイツや北欧の幾多の傑作を翻訳したのみならず、近代フランスの名作の名訳も亦少くない。我等は鷗外先生の名訳によって、どのくらい啓発され、示教されたかわからぬ。先生の事業を狭く翻訳に限っても、翻訳自体が立派な日本文学となっている以上、それだけでも、鷗外先生は文章の拙い作家たちよりも遥に高い地点に立つ巨匠と僕は信じている。或日、観潮楼に先生を訪ねた時、親しく先生の口づてに聴いたところに依ると、「自分はフランスの小説を訳す時には必ずドイツ書

に拠ることにしてはいる。フランス語からでも訳せぬことはないが、暇がかかるので、結極ドイツ文から訳すことになるのだ。」

という話であつた。この事は先生は一度も公表しなかつたが、私見としては先生自らこの事を公表しても一向差支なかつたのではないか。ありのままに言われた方が一層先生の光を増すものではなかつたかと、少くも僕は今でも考えている。

(昭和二十五年十二月)

日本文学電子図書館

鷗外先生

著 者：辰野 隆

制作者：宮澤一郎

底 本：「忘れ得ぬ人々と谷崎潤一郎」

中公文庫、中央公論新社

2015年2月25日 初版発行

日本文学電子図書館